

野生の思考とトイレ

牧師 山本 護



無機的で何の変哲もないような集会所のトイレ。便器、中古品を水道屋さんにもらったので無料。洗面台、300円のステンレスボウルで製作。金属製のワゴン、古道具屋で1,200円。照明、IKEAの水切りボウルに電球ソケットを組み込んで1,400円。木製の棚、縁材をうまく生かした青柳棟梁の技あり。壁面、信徒たちが珪藻土で塗って雅趣に富む。レンガ敷きの床、ひんやり淡々として無口。これらが、ありあわせで構成されたトイレに、八ヶ岳伝道所の

姿が滲み出ている気がします。

20世紀後半、近代の思想体系が問い直されるうねりがありました。そのど真ん中にあっただのがC.レヴィ=ストロース(1908~2009)が著した「野生の思考」。野生の思考は、未開社会は「野蛮」なのではなく「文明人」とは異なる高度な知性に統御されていることを発見したりレポートです。その代表的な実例が、複雑精緻な婚姻制度と「ブリコラージュ(身近にある材を用いて自分の手でものを作る)」。ブリコラージュとは要するに、専門家による構想に従っての作業ではなく、周囲の自然物や廃材をよく観察し、見極められたモノに導かれて全体を作っていくこと。ですから完成するまで、その形や大きさは不明です。日本の場合であれば、縄文人や先住民がこれに長けていたと言われていました。

ゆっくりゆっくり進む礼拝堂と集会所の建築を眺めながら、私は野生の思考を反芻していました。かといって私たちには、縄文人のような想像力や活力は望めないし、快適さの条件も口うるさくなっていますから、試みのブリコラージュを必ずしも楽観視できません。その点、信徒の中に近代と野性を橋渡しできる柔軟な棟梁がいてくれたことは幸いでした。ブリコラージュは必然的に「ゆらぎ」を生じさせるため、いずれまたここに混沌(創造の源泉)を招くことになるでしょう。

主はバベルの塔を見て言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。～我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられないようにしてしまおう(創世11:5~7)」。

同じ価値観に同調させられるグローバル経済、支配者の言語が強要される覇権。この息苦しい一貫性は御手によって崩され、人々は解き放たれて己が野生の思考を恢復させる。観念的な教会のドグマ(教義)もまた、キリストを喚起する現実という「自然物」によって変容し続けるでしょう。こうした壮大な潮流を、八ヶ岳の小さな集会所のトイレが人知れず暗示している。はたして誇大妄想か、神は細部に宿るのか。Ω